

俳諧に現れた「日常」の美学とその特性

— 日韓詩歌比較の観点から —

ユ 玉姫

I. はじめに

人間の命は日々の暮らしとしての「日常」、すなわち「衣食住」の営みによって支えられていると言えよう。最近、戦争、テロ、災害などでこの「日常」が失われつつある。2013年、東日本大震災後に長谷川權は「ピーポーと救急車ゆくとある町のとある日常さへ今はなつかし」（震災和歌）と詠んでいる。想像を絶する惨事に際し、救急車が走っていたある日の日常さえなつかしいということである。最近の映画「深夜食堂」も震災などから日常を失った人たちが深夜の食堂でソルフードを食べつつ癒されるという内容で、人気を博した。また、韓国のある政治家は、「夕餉のある暮らしを戻してあげる」というキャッチフレーズで生活難に苦しむ人たちの心を得ようとしている。これらは人間にとってごく普通の「日常」がどれほど重要なのかを物語ってくれる。

失われた「日常」の価値を再確認する視点から日本の「俳諧」を照らしなおしてみたいと思う。筆者は1983年日本に留学して以来、30余年間俳諧を学びつつ研究を続けてきた。留学中の1988年、国文学研究資料館の第12回「国際日本文学研究集会」において芭蕉俳諧について研究発表をしたことがある。そのご縁で2016年40周年を迎える集會に際して、これまでの研究に照らし合わせながら俳諧における「日常」の美学を語らせていただくことになり、感慨深いものがある。国と国、人と人との関係において互いの「日常」を知り、分かち合うということは心と心が触れ合うことでもある。

Ⅱ. 俳諧と「日常」

「日常」は芸術とはかけ離れていることのように思われがちである。ところが、「庶民の日常」を芸術化するにおいて俳諧を凌駕する文学ジャンルはないような気がする。

寒菊や小糠のかかる白の端	芭蕉
夕顔に雑炊あつき藁屋かな	越人
鶯や家内揃ふて飯時分	蕪村

白を挽いている庭先の寒菊、雑炊を食べる藁屋の夕顔、家内揃って食事をする時に聞こえてくる鶯の声など、庶民の日常と自然とが見事に照応している。昔ながらの季節の素材も日常の中でその美しさが語られ、「命の喜び」のようなものさえ感じさせてくれる。

次の句は「日常の営み」の些細な変化から「季節」を感じ取ったものである。

行水も日まぜになりぬ虫の声	来山
蚊帳とりて天井高き寝覚かな	許六
扇置く秋を屏風の折り目かな	沙明

毎日繰り返される「衣食住の営み」の「変化」に気づいている。「虫の声が聞こえる、そういえば行水を一日置きにやるようになった、もはや秋だなあ」というふうに季節の変化を感じている。蚊帳を取り、普段より高く感じられる天井、扇が要らなくなり、冷たい風を防ぐために立てた屏風の角張った折り目に秋を感じ取っている。

俳諧は先行する和歌や連歌と区別しながら新しさを求めるなかで、季題が変化してきたことはいろいろ指摘されているところである。①雅→俗、②縦題→横題、③歌語→俳言、④自然→人事、という題の変化である。これらの変化において共通的に言えることは、自然の一部としての「人間」が中心で、人間の「衣食住」の営みを眺めている要素があるということである。つまり、作品において人間の息づきを感じられるということである。

生住異滅・流転する自然の一部として「人間」を眺め、刹那を生きる存在へ

の憐れみを詠んでいる。無常の断面としての「日常」の美は永遠の時間の流れを意識したものでもあり、「永遠の美」に繋がると言えるだろう。

俳諧に描かれた日常文化を理解する上で、日本の近世には膨大な資料が出されている。数々の歳時記、季寄せ、風俗志、風俗図会、名所図会、博物誌などがそれである。『増山井』(1663)、『滑稽雑談』(1713)、『俳諧通俗志』(1717)などの俳書、『人倫訓蒙図彙』(1690)、『和漢三才図会』(1712)などの図会、『守貞謾稿』(1853)などの百科事書類がそれである。人間の日常の暮らしへの関心が数々の事典類が生み出される原動力になった。現在はデジタル時代に入り、これらの資料を世界のどこからでも見られるようになり研究環境の画期的な変化がもたらされている。いわば、日本の深層文化が見られるのである。

Ⅲ. 研究過程と「日常」

今回の講演で、今後「国際日本文学研究集会」で発表する後学の方たちに少しでも参考になるように、これまでの研究の過程において当面の「日常」の問題にたどり着いた過程を述べさせていたいただきたいと思う。

筆者は1980年代松尾芭蕉の俳諧から研究を始め1988年に「芭蕉の季節感——時雨と五月雨を中心に」という題で国際日本文学研究集会で発表させていただき、これが博士論文の根幹にもなった。1991年、韓国に帰国してからは俳諧を韓国の定型詩「時調」と照らし合わせながら両者の特徴を探る作業をしてきた。最近は与謝蕪村の俳諧を中心に研究を続けている。これまでの研究を三つの著述『芭蕉俳諧と季節観』(2004)^①、『俳句と日本的感性』(2010)^②、『蕪村俳句と生活の美学』(2015)^③でまとめている。これらの研究を通して目下「日常」という課題に帰着した過程を考えてみたい。

まず、博士論文をまとめた『芭蕉俳諧と季節観』では、芭蕉の中心季語である「時雨」をキーワードに『万葉集』から『猿蓑』までの季節観の脈絡を辿った。例えば、『万葉集』の「時雨の雨間無くし降れば三笠山小末あまねく色づきにけり」は紅葉を染める時雨の「叙景」であり、『新古今集』の「世にふるは苦

しきものを槓の屋に安くも過ぐる初時雨かな」はやすやすと通りすぎる時雨に比して生きにくい世への「述懐」を詠んでいる。ところで、『猿蓑』という題のきっかけにもなった芭蕉の「初時雨猿も小蓑をほしげなり」には、時雨の雨粒にじかに打たれている生活感覚が表れ、冷えさびた時雨の情緒を体感させてくれる。『猿蓑』の巻頭の凡兆の句「時雨るるや黒木つむ屋の窓明り」は、炊事のための薪である「黒木」が積んである民家、部屋の窓明りから想像される家の温もりとが時雨と見事に調和した作品である。時雨が降っても黒木で家の中は温かいだろうと想像される。

『俳句と日本的感性』（2010）では、日本の詩歌は基本的に‘時間の流れのなかの刹那の光を捉える’ことに関心が持たれていることを述べた。はかなく散る桜、枯れてしまう草花、弱ってゆく虫の音などが好まれるのもそのためである。日本人は日々の暮らしにおいて何かを‘待つ→気づく→初物→（盛り）→移る→名残→惜しむ→待つ’というようなプロセスで時々刻々季節の移りを意識している。夥しい数の季語の発達と増加はそこに根ざしていると言える。そして、敢えて「盛り」は詠まず、生滅する存在としての自然と人間との共感が基本になっており、「日常」的に季節の移りを意識している。

『蕪村俳句と生活の美学』（2015）は、「日常」を芸術化して詠み残した与謝蕪村の作品に着目した著述である。蕪村は、日常を生きる人々への関心が強く、様々な部類の人物を詠んでいる。仏者、儒者、農民、下層民、病人、罪人、狂女、様々な職業の人、歴史上の人物、各地方からの人などが作品に描写される。そして、人間の「衣食住」が美しく描かれている。町、家（小家）、銭湯、質屋、魚屋、路地、室内風景、台所、家財道具（布団、蚊帳、火桶など）などがそれである。有名な蕪村の絵「夜色楼台雪万家図」は様々な形で日々を暮らす町の人たちが眠りにについている家々を暖かい眼差しで描いたものである。また、蕪村俳諧において注目すべきことは、「鮓」（魚を発酵させた「馴れ鮓」）が19句も詠まれており、日常の台所の風景までもが俳諧ならではの美的結晶として称えられていることである。

蕪村における日常の美学を知る上で『俳諧通俗志』（1717、児島胤矩）などの俳書や『人倫訓蒙図彙』^④などの風俗関連の分析が必要であった。特に、『俳諧通俗志』は「時令」の部に季語が並んでおり、「通俗」という言葉が示すように、「俗」なる「人事」の季語が圧倒的に増加している。なかでも「夏」と「冬」の人事の季語が目立って増加していることに注目される。そして、蕪村俳諧の「人事」の季語は殆どのが『俳諧通俗志』に収められている。

近年、筆者は俳諧や和歌を韓国の定型詩「時調」と照らし合わせながら両者の特徴を探る作業をしている。世界の歳時記についての共同研究が一つのきっかけになった^⑤。日本の和歌の作者層は貴族階級が多く、俳諧は庶民階級が多い。反面、韓国の「時調」の主な作者層は儒者たちである。和歌や俳諧は、仏教思想に支えられ、「飛花落葉」する自然の刹那を捉え、韓国の「時調」は儒教思想に支えられ、逆境にも屈しない美徳を強調する。「万古常青」（松）、「歳寒孤節」（竹）、「傲霜孤節」（菊）、「氷姿玉質」（梅）などの言葉が頻繁に登場し、「不変」、「気概」、「孤高」な美徳が強調される。同時に人間社会への批判意識も目立つ。

また、日韓の四季の景物を称えた歌に、日本の「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすずしかりけり 道元」（傘松道詠集）と、韓国の「酒債は尋常行く処に有り／人生七十古来稀なりという／春は花柳、夏は清風、秋は月明、冬雪景に／南隣北村みな招き遊ぼう／人生は朝露の如きものを遊ばずにいられようか 作者未詳」（青丘永言）がある。夏の景物において日本の「時鳥」と韓国の「清風」との対照が興味深い。『古今集』の夏の部の殆どが「時鳥」の歌で、俳諧集の巻頭を「時鳥」が飾っている。時鳥が日本の夏の最も代表的な景物であることは、何を意味するのであろうか。韓国の時調にも恋の歌に時鳥がよく詠まれたりはするが、夏の代表的な題としては「清風」が出されている。川遊びの際に当たる涼しい風のことである。日韓両国の文人たちの夏の日常を想像させるものがある。

以上、これまでの研究と今後の課題をみると、詩が生まれた土台としての日

常というのが常に頭にあったことが分かる。留学当時、指導教官である堤精二先生からお聞きした「文学研究というのは常に自分のアイデンティティを模索していく過程だ」ということを胸に刻み、作家や作品に対面したとき自分に新鮮に伝わってきた問題意識を掴んで探ってきたのが今まで繋がっている。時調に慣れていた筆者としては、俳諧を研究し始めた当初から「日常」というテーマが既に芽生えていたかもしれない。

Ⅲ. 俳諧における「日常」の美学

1. ‘人’ への関心

俳諧においては先行する和歌や連歌よりも‘人’に対する関心が高くなっていると言える。芭蕉は‘日常を生きる凡人の姿’を次のように芸術化している。

炉開きや左官老い行く鬢の霜	芭蕉
木枯や頬腫れ痛む人の顔	芭蕉
(連句) 灰汁桶の雫やみけりきりぎりす	凡兆
油かすりて宵寝する秋	芭蕉
(連句) 市中はものにはほひや夏の月	凡兆
あつしあつしと門々の声	芭蕉

暮らしのなかで出会う人の横顔や表情が哀感や情感を持って描かれている。特に、上の『猿蓑』の二つの連句における芭蕉の脇句は、農家や市場での庶民の暮らしに対する深い人間理解に基づいていると言える。

蕪村は画家であっただけに‘人’に対する関心はもっと強い。人々の仕草や表情が恰も印象派の人物画のように具象化されている。

肘白き僧のかり寝や宵の春
麦秋や狐ののかぬ小百姓
腐儒者葦の藁くらひけり
おどり好中風病身を捨かねつ
昼舟に狂女乗せたり春の水

ゆきたけを聞かで流人の裕哉

僧、小百姓、儒者、中風病みの人、狂女、流人など、様々な部類や境遇の人が描かれている。これらがただの人物画と異なるのは、‘季節の流れの中の人間の営みの一瞬’を哀憐の情と共感を持って眺めているという事実である。

2. 「衣食住」と「日常」

「年暮れぬ笠きて草鞋はきながら」と詠み、一生を「旅」という「非日常」に生きた芭蕉は普通の人々の「日常」を懐かしんでいる作品を数々残している。

旅寝してみしや浮世の煤払い

すす掃きはおのが棚つる大工哉

暮れ暮れて餅を木魂の侘寝哉

世の中は稲刈る頃か草の庵

新年を迎える準備で家を掃除したり、棚を吊ったりする「普通の民家」の暮らしとは縁遠く、正月を迎えても餅を搗くこともなく、収穫の時期になっても稲を刈ることもないといった、‘衣食住の営みから遠ざかっている’心の寂寥さを詠んでいる。

反面、京都の町の一隅で「日常」を生きた蕪村は、人間の日々の暮らしの奥深いところまで体感し、その感覚をじっと凝視しつつ句を詠んでいる。前述した「鮓」の19句は民家の台所など、暮らしの深層を知らなければその情緒が伝わらない作品だと言える。放浪者の芭蕉は「鮓」を詠んでいない。「鮓」は「握り寿司」とは全く違い、魚をご飯にまぶして石で押して乳酸発酵させた「馴れ鮓」のことで、夏の季語である。『俳諧初学抄』（1641）六月の部に「鮓の鮓」が見える。暗い暗所で時間をかけて発酵させることから、その情緒は定住者でなければ分からないだろう。蕪村の代表的な鮓の句を次にあげる。

寂寞と昼間を鮓のなれ加減

鮓つけて誰待つとしもなき身かな

鮓つけてやがて去ニたる魚屋かな

手燭してすしうかがはん夙に起きて

鮓を押す石上に詩を題すべく

薄暗い台所の空気と匂いまでもが感じられる、俳諧ならではの世界である。「寂寞と昼間を鮓のなれ加減」について萩原朔太郎は『郷愁の詩人 与謝蕪村』で次のように述べている。

鮓は、その醋が醗酵するまで、静かに冷却して、暗所に慣らさねばならないのである。寂寞たる夏の白昼。万象の死んでる沈黙（しじま）の中で、暗い台所の一隅に、こうした鮓がならされているのである。その鮓は、時間の沈滞する底の方で、静かに、冷たく、永遠の瞑想に耽っているのである。この句の詩境には、宇宙の恒久と不変に関して、或る感覚的な瞳を持つところの、一のメタフィジカルな凝視がある。^⑥

鮓をつけ発酵を待つことが見事に芸術化しているのである。夏の昼間の寂寞とした家の雰囲気と石に押されて静かに発酵する「鮓」の感覚が照応している。上述の最後の句「鮓を押す石上に詩を題すべく」は「鮓」が芸術に繋がる、まさに蕪村の「離俗論」を言っているとも言えよう。

では、俳諧における「衣食住」の中の「衣」をもう少し見て行こう。

越後屋は絹裂く音や更衣	其角
猿引きは猿の小袖を砧かな	芭蕉
初秋や畳みながらの蚊帳の夜着	芭蕉
かげろふの我が肩に立つ紙子哉	芭蕉
眇なる医師わびしき頭巾哉	蕪村

其角の句は、呉服屋の絹を裂く音から更衣の季節を感じるといった、町角の日常風景がいかにも鮮やかに詠まれている。また、猿の小袖に砧を搗つ「猿引き」、まともな服もなく防寒のために着ている紙子に立つ陽炎、眇の医者頭巾などなど、各々、「衣」を通して日常を生きる人たちの表情を描いている。

「衣食住」のなかの「食」は俳諧においてもっとも増えた季語である。

目には青葉山ほととぎす初鯉	素堂
---------------	----

めづらしや山を出羽の初茄子	芭蕉
あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁	芭蕉
寂寞と昼間を鮓のなれ加減	蕪村
葱買うて枯木の中を帰りけり	蕪村
冬ざれや北のやかげの蕓を刈る	蕪村
喰物に笠もぬがずよ心太	白雄

初鯉、初茄子、河豚、鮓、葱、蕓、心太など、俳諧において頻出する食物関連の季語が詠まれている。森川昭は「歳時記の中の食」において江戸初期の北村季吟の『増山井』では「食」が1,900の季語のうち172の語が収録されており、9%であったのが、『俳諧歳時記栞草』では3,400の季語のうち「食」は480で14.1%に増加しているとしている^⑦。「食」は和歌や連歌においてはあまり登場しなかっただけに俳諧においては積極的に詠まれるようになり、江戸初期から後期の間にもその増加の勢いを見ることができるといえる。特に「初鯉」と「初茄子」などの「初物」は、貞享3（1686）年には「初物禁止令」が出されるくらい流行ったが、季節情緒を基盤にした日常文化の一端を示していると言える。

最後に、「衣食住」のうちの「住」を見てみよう。

なに喰うて小家は秋の柳陰	芭蕉
寝ごゝろや火燵蒲団のさめぬ内	其角
菜の花や油乏しき小家がち	蕪村
凧や何に世わたる家五軒	蕪村
銭湯に魚屋入しよ冬の月	蕪村
両村に質屋一軒冬木立	蕪村
蓬生やてぬぐひ懸て竹婦人	蓼太

炬燵、竹婦人のような日常の家財道具や、銭湯、質屋、魚屋などの庶民の住居空間が生活臭を放ちながら季節情緒を発散している。「なに喰うて小家は秋の柳陰」という芭蕉の句や、「菜の花や油乏しき小家がち」、「凧や何に世わたる家

五軒」などの蕪村の句からは、一日一日を精一杯生きていく庶民の暮らしに対する哀憐の眼差しが感じられる。特に蕪村が頻繁に使っている「小家」という言葉は単なる家の大きさを指すものではなく、庶民たちの素朴な暮らしぶりを表す詩語だと言える。蕪村は「小家」という言葉を23回も使っており、「家路」を詠んだ作品も7句見られる。

Ⅳ. 時調における「日常」

1. 田園と江湖の「日常」

日本の俳諧と違い、韓国の朝鮮時代の「時調」には庶民の日常があまり詠まれていない。前述したように儒者が主な作者層であったためであろう。ところが、権力から逃れた儒者たちによって「田園」や「江湖」、「海辺」での日常が四季の風景に彩られ、生き生きと詠まれていることが見受けられる。四時を眺望して詠んだ連作の形が多い。

田園歌の場合は辛啓榮の『田園四時歌』（17C）、李徽逸の『楮谷田家八曲』（17C）、金光煜の『栗里遺曲』（17C）、權桀の『屏山六曲』（18C）、魏伯珪の『農歌九章』（18C）などなど、数々の四時歌などがそれぞれである。

儒教は「農者天下之大本」を唱え、農事を奨励することは統治の手段でもあった。そして連作の田園歌は中国の『詩経』の「豳風、七月章」などの影響が考えられる。「豳風、七月章」は紀元前1100年頃、周の国の周公が摂政を辞してまだ幼い成王を即位させては、百姓の農事の苦難を認識させるために詠んだものである。

七月流火 九月授衣 一之日罽發 二之日栗烈 無衣無褐 何以卒歲 三之日于耜 四之日舉趾 同我婦子 饁彼南畝 饁彼南畝。田峻至喜

七月、火星が西に流れると、九月、家族の衣を備える、十一月、寒い風吹き、十二月、寒さ厳しく、衣がなければ、いかに年を越せようか、年明けて三月、鋤の手入れをし、四月、足を上げて耕す、我が妻子とともに、南の畑に小昼運んでくると、田んぼの役人も喜ぶであろう。

（『詩經』「豳風、七月章」）

三千年もの前のものなのに農事の日常が具体的に述べられており、驚くべきである。韓国の朝鮮時代に太宗などの王が饗宴の際、芸妓たちに「豳風、七月章」を暗誦させたりしたこと^⑧や、「豳風七月図」などの絵が農事を奨励するためによく画かれていることをみると、たしかに影響関係が見受けられると言える。

麻の股引 手鋤担ぎ 田畑の 草取り

農夫歌 嘯き 月とともに 帰れば

妻酒を濾し 明日は 裏畑 草取らんとす （申喜文『青丘永言』）

これらには「農事の苦しさ」よりも、「農事の日常」の「興」を詠んでいるのが特徴であると言える。

また時調では、やはり権力から逃れた儒者たちによって「江湖」や「海辺」における日常も生き生きと詠まれている。「江湖四時歌」、「漁父四時詞」がそれである。中国の楚の忠臣「屈原」故事に出る「漁父辞」がよく引用され、影響を受けていると言えるが、次第に海の日常の「興」として発達した。四時の漁父の日常が描かれる

蓮の葉もて飯を包み 肴は要なし / 帆を上げよ 帆を上げよ

笠はかぶれり 蓑もてまいれ / ぎいこ ぎいこ よいしょ

無心の鷗を我追いしや 鷗が我を追いしや（尹善道「漁父四時詞」（夏二）

「眺める海」ではなく、実際漁労の日常の楽しみや心の自由を詠んでいるものとして注目される。これについては、最近、「尹善道「漁父四時詞」——日韓詩歌の海の比較を試みながら」^⑨という題で日本に紹介したことがある。

2. 辭説時調と「日常」

「時調」においても朝鮮時代末期になっていくと庶民作者が現れ、庶民の現実を写實的に詠んだ作品が出てくる。やや散文化した時調で、作者未詳が多い。内容においても風刺、鬱憤、揶揄、性など、様々な形のものが詠まれている^⑩。

火入れずとも 自ずと炊くる釜

稗食わずとも 肥ゆる馬、機織上手の妾、酒湧く薬缶

豚肉くるる牝牛、ゴーゴーこの五つさへあらばや (歌曲源流)

いわゆる「新五友歌」と言われる作者未詳の作品である。これは、儒者の美徳を称えた「五友歌」に対する揶揄である。儒者の尹善道が「五友歌」において水石松竹月を連綿、不変、志操、節概、寡黙などの徳目を持ったものとして称えているのを振り、上記のように暮らしに必要なもの五つこそ五友であると言いつ返している。「ゴーゴー」は牛の鳴き声と‘五つ’の友を掛けた言葉である。

以上のように、庶民の日常が反映された辭説時調が朝鮮後期19世紀ごろから詠まれているが、数的に少なく、主流文学ではなかった。ところが、民衆が批判精神を持って文学活動をしたという事実は注目すべきであろう。

結びに代えて

日韓詩歌比較の観点から見た俳諧の「日常」の美学を見てきた。時調は基本的に儒者の文芸から出発し、孔子の「詩三百 思無邪」に習い、「道本文末」の姿勢を標榜している。そして、官吏の登用試験である科挙には必ず詩文が出題されるため儒教的な美徳が重視され、「日常」はあまり詠まれていない。その代わり、権力から逃れた儒者によって、農作業や漁労の「日常」が一部詠まれており、朝鮮後期は庶民詩の芽生えも見受けられる。

日本の俳諧は庶民の文芸として定着し、自然の一部としての人間に焦点が合わせられている。まさに「日常」の芸術化が達成されている。そして、季節の推移における「衣食住」の営みが哀憐と笑いの視線で描かれている。「衣食住」の事物が美の結晶として具象化されていることは我々をして毎日生きていく意味を喚起させてくれる。「日常のひとコマ」が意味を持つ瞬間、「永遠」の命に繋がるのである。

俳諧における「日常」の美学は、破壊されつつある日常の価値を再認識させ

るにあまりあると思う。だが、一方、時調に見られる「興」、「批判精神」、「気概」、エネルギーを発散する「遠心力」などには欠けていると言えようか。俳諧は「日常」の芸術化ということで庶民文学として定着し、繊細ではあるが、「求心的」視線から「自己憐憫」の要素が見受けられるという側面、「興」や「批判精神」の不在などが指摘できようか。

世界の人々の日常を理解し合い、共有することは平和への近道であると思う。日常を詠んだ詩の心は普遍的で、世界を結ぶことができる。今や世界は同時間帯で結ばれており、情報も瞬時的にアクセスできるデジタル時代になっている。国文学研究資料館はその役割が果たせる機関だと思い、40周年を際して望みを託してみる。

【注】

- ① 拙著『芭蕉俳諧と季節観』信山社、2004
- ② 拙著『俳句と日本的感性』J & C 出版、2010
- ③ 拙著『蕪村俳句と生活の美学』J & C 出版、2015
- ④ 朝倉治彦校注『人倫訓蒙図彙』平凡社、1990
- ⑤ 東聖子・藤原マリ子（編）『国際歳時記における比較研究——浮遊する四季のことは』笠間書院、2012 参照
- ⑥ 萩原朔太郎『郷愁の詩人 与謝蕪村』青空文庫、2014 http://www.aozora.gr.jp/cards/000067/files/47566_44414.html (2017.1.8)
- ⑦ 森川昭「歳時記の中の食」『国文学』第29巻第3号、学灯社、1984.3、pp.66-67
- ⑧ 「上王邀上 設宴于慶會樓 上王令妓 頌幽風七月篇」『太宗実録 卷23、42章。』など、『朝鮮王朝実録』に50回の用例が見られる。<http://sillok.history.go.kr/search/searchResultList.do> (2017.1.8)
- ⑨ 拙稿「尹善道『漁父四時詞』——日韓詩歌の海の比較を試みながら」鈴木健一編『海の文学史』三弥井書店、2016
- ⑩ キム・サンジン「朝鮮後期時調と日常の再発見」『語文論集』56集 中央語文学会、2013.12、pp.149-179

参考文献

- ・キム・サンジン「朝鮮後期時調と日常の再発見」『語文論集』56集 2013.12、pp.149-179
- ・東聖子・藤原マリ子（編）『国際歳時記における比較研究——浮遊する四季のことは』笠間書院、2012
- ・朝倉治彦校注『人倫訓蒙図彙』平凡社、1990
- ・森川昭「歳時記の中の食」『国文学』第29巻第3号 学灯社、1984.3
- ・拙稿「尹善道『漁父四時詞』——日韓詩歌の海の比較を試みながら」鈴木健一編『海の文学史』三弥井書店、2016

- 拙著『芭蕉俳諧と季節観』信山社、2004
- 拙著『俳句と日本的感性』J & C 出版、2010
- 拙著『蕪村俳句と生活の美学』J & C 出版、2015
- 『朝鮮王朝実録』
<http://sillok.history.go.kr/search/searchResultList.do> (2017.1.8)
- 萩原朔太郎『郷愁の詩人 与謝蕪村』青空文庫、2014
http://www.aozora.gr.jp/cards/000067/files/47566_44414.html (2017.1.8)